

郵便配達員の  
モザンビーク日記

茂山 美久



## 郵便配達員のモザンビーク日記

僕は郵便配達員で、採用十四年目の中堅職員である。

学生時代にアルバイトをしていた関係で就職し、基本的に一日の配達の仕事がその日で終わり、次の日に繰り越さないこと、そして、体を動かすことで集中し、時間があつという間に過ぎて行くところが性に合っている。

ある日、一軒のお宅にお米が届いた。

家の方がいらつしゃったので、

「お米が届いておりますので、ご印鑑かフルネームのサインを頂けますか」と言つと、思いがけない言葉が返ってきた。

「砂糖ですか？」

僕は耳を疑い、どう見ても米袋に入ったお米なので、

「いや、こちらはお米になりますね」

と言つと、また家の方が、

「砂糖ですか？」

僕は訳が分からず、お米の重みに耐えながら、

「いやこれはお米ですから」

と突き放すように言った。

すると突然、怒った口調で、

「いや、印鑑を押すのに佐藤か山田か聞いてるんだよ」

「……………」

このお宅は、佐藤さんと山田さんの二世帯住宅だった。

そんな僕が、青年海外協力隊員としてモザンビークに派遣されることになったきっかけ。

それは、外国人になりたいという理由からだった。

\*

僕が暮らしている街は鋳物産業が盛んで、アジアを中心に多くの外国籍の研修生が暮らしている。

日々の配達でそれらを実感するようになり、多文化共生をテーマにしたセミナーなどに参加するようになった。

そして、多くの外国籍の方と接するうちに、日本での生活を楽しんでほしいと思うようになり、本当に外国籍の方の立場、気持ちを理解するには、僕自身が外国人になる、つまり観光ではなく、海外で地域に根ざして生活することが必要だと考えるようになった。

人間、四十近くになると、人生このままでいいのかという、何かきっかけのようなターニングポイント探しの時期が来るのかもしれない。

親父も、僕と同じような年齢になって会社を設立している。

妻は青年海外協力隊経験者で、僕と結婚する前に二年間、日本語教師としてトンガ王国に派遣され、現在は南米の方に対する日本語教室に携わっている。

そんな妻が言った。

「あなたの希望する村落開発普及員は、高学歴の人が多かった気がする。やっぱり英語もかなりできないといけないんじゃない？」

専門的な資格がない僕でも応募できる村落開発普及員という職種は、例えば農業省などに配属され、農民グループの現金収入向上等をサポートするなど、いわば現地の生活に密着して地域の活性化に取り組む活動で、コミュニケーション能力や調整力、企画力などが求められ、一定の語学力も必要である。

英語は地元の英会話教室で七年間勉強したものの、語学力ははっきり言ってない。

ボランティアは、NPO法人の主催するスタディーツアーに参加し、十日間ほど、フィリピンのパヤタスという地区でボランティアを行った経験はあるものの、それ以外は職場の労働組合の運動として、地域清掃や手話教室などの活動を行ってきただけであった。

フィリピンでの活動はもう九年も前のことだし、村落開発の基礎ともいいうべき農業知識

もない。

そんな時始めたのが、地域に暮らす南米の子供たちを対象としたサッカー教室のボランティアだった。

子供たちは日本語があまり話せないこと、日本文化になじめないことなどを理由に学校に通わず、居場所があまりない。

その子供たちの居場所づくり、日本人児童との交流を目的に始まったこの教室は、ブラジルを中心にコロンビア、ペルーなど、六歳から十二歳までの外国籍児童約四十人が参加している。

小学校からずっとサッカーを続け、今も地元のリーグでプレーしている僕にとって、このボランティアは国際協力の現場経験のためにまさにうってつけだった。

加えて、南米ユニフォームコレクターの僕は、サンパウロ、ウニベルシタリオなどのユニフォームを着て、

「センセイ、サンパウロ、ダサイヨ」

と生徒に反応してもらえるのがとてもうれしかった。

何せ日本では、南米ユニフォームの価値が上がらず、いじられることがほとんどないのだから。

このボランティアで学んだこと、それは、異文化を持った人たちに対するコーチングの難しさ。

日本では当たり前なことが通じない。

六歳〜九歳のクラスを受け持ったのだが、練習中に座り込む、いなくなるなど集中力がない。

キャプテンは俺だと言っ子が何人もいて自己主張が激しい。

試合が引き分けに終わると、決着をつけるためにPK戦までもつれこみ、白黒はつきりつけなければ収まりがつかない。

しかし、それは彼らの文化でもあり、良いところでもある。



子供たちは木の上からサッカー観戦

尊重しながら、いかに彼らを巻き込んで地域を活性化して行くのか、そんなことを考えながらプレーしていた。

\*

農業の基礎知識がない僕は、青年海外協力隊経験者の方が運営している研修に参加した。二泊三日の研修で、主に農業研修、農村開発法などを学ぶ。

参加者は青年海外協力隊派遣予定の方や青年海外協力隊希望者がほとんどで、こうした人たちとじっくり話す機会はとても刺激になった。

何より大きかったのは、農業研修の現場はもちろん、これからやろうとすることが明確なイメージとなって自分の中に芽生えたことだった。

研修のプログラムで農家のお宅を訪問したとき、

「隣の人が三日も畑に来なければ、心配で見に行くんだ」と話していた。